平田仁胤 著
『ウィトゲンシュタインと教育
——言語ゲームにおける生成と変容のダイナミズム』

渡邊福太郎（Fukutaro Watanabe）

ウィトゲンシュタインの哲学は、いままや着実に教育学分野での市民権を獲得しつつあるように見える。1990年代以降、英語圏では個別論文のほかに少なくとも4冊の研究書が書かれ、日本でも同時期に丸山恭司による先駆的業績が生まれている。そして、ウィトゲンシュタイン哲学の本格的な導入がはじまった1990年代半ばから約20年の時を経て、教育学では初となる、日本の研究者によるウィトゲンシュタイン研究書として登場したのが、本書『ウィトゲンシュタインと教育——言語ゲームにおける生成と変容のダイナミズム』である。

「あとがき」によれば、本書は著者が2010年に広島大学に提出した博士論文「言語使用の規範性の変容可能性に関する研究——ウィトゲンシュタインの言語ゲーム論を中心に」に、「僅かばかりの加筆・修正を加えたもの」[188]であるという。教育学における先行研究を網羅的に整理した「序章 研究の目的と先行研究の課題」と、全体の結論部である「終章 ウィトゲンシュタイン哲学の教育学的意義」に4つの章を加えた、全6章で構成されている。

本書のねらいは、言語ゲームの創造的側面とそのダイナミズムを描き出すことによって、ウィトゲンシュタイン哲学を「体制順応主義」として捉えてきた従来の解釈を覆すことにある。著者は、教育学では必ずしも主題的に論じられてはこなかった——教育とは無関係に思わざる——哲学的議論の深みにあえて潜り込み、教育学的に重要な帰結を取り出している。この点で、本書は教育学におけるウィトゲンシュタイン研究の新たなモデルを示すことに成功していると言えるだろう。また、論証のスタイルはきわめて分析的である。ウィトゲンシュタインの哲学にじみのない読者であっても、著者とともに要点を理解し、教育をめぐる哲学的な思考のプロセスをたどることができる。そのため、かえって議論を難解にしてしまうかもしれないが、まずは本書の内容を一通り概観し、その後でいくつかの論点を提起してみたい。

本書のなかで最大の分量を占めるのが、「第1章 規則遵守論における言語ゲームの相克——内規範性と外的規範性」である。この章で著者は、「規則のパラドクス」をたがかりに、規則変容のダイナミズムを解き明かしている。著者によれば、規則をめぐる学習者と教育者の矛盾を契機に、規範性は「内規範性」と「外的規範性」とに分化し、その結果、両者が「矛盾を生じつつも解消するという動的な運動」[63]が生まれる。教育のプロセスに内在する、学習者と教育者によ
ある双方向からの矛盾を解消する運動」[67]を、筆者は規則変容のダイナミズムとして捉えている。そして、ウィトゲンシュタインは「体制順応主義を帰する議論は、ウィトゲンシュタイン解釈として不十分」であるとされ、「学習者が規則の変容可能性を展望させることができ、彼の規則遵守論が示唆する重要性であることを明らかにした」[68]という形式で、本章の成果がまとめられる。

第2章「私的言語」論における言語ゲームの可変性——人権権利と人権規範」では、「私的言語」をめぐるウィトゲンシュタインの思考を舞台に、規則変容のダイナミズムが描写される。著者によれば、感覚表現の言語ゲームには「感覚を表現する個人と共同体との間の生じ得る矛盾を相互調整する機会」と、この「相互調整を通じてゲームの規則が変化し得る」可能性が含まれている。従来のウィトゲンシュタイン研究は、この可能性を十分に検討してこなかったため、「学習者が共同体へと一方的に参入したという教育モデル」[97]にとどまっていた。これに対し、「学習者が自らが可変的な規則を編み上げていく存在となる」と[iibid.との指摘が、著者のオリジナルな解釈として提示される。」

第3章規準論における言語ゲームの多様性——多重性、阻却可能性、動揺性」で議論の枠組上に載せられるのは、ウィトゲンシュタインの「規準」概念である。多くの場合、「他我問題」とセットで論じられてきた規準の阻却可能性に関する議論を、著者は野矢茂樹や丹治信春とともに、規準概念の「家族的類似性」というウィトゲンシュタイン本来の文脈に差し戻す[112]。そのうえで著者は、「2人の解釈には、規準のダイナミズムを十分に解明していないという問題点」[115]があると指摘し、「人間の視点の違いによってもたらされる〔規準の〕揺れ動き」[117]について、ウィトゲンシュタインが具体的に論じた箇所へと考察を進めていく。最終的には、「大人の規準はそれ自体揺れ動きの中にあり、子供はその揺れ動きへと参入する」がゆえに、「規準概念から導かれるウィトゲンシュタイン哲学は体制順応主義を帰結しないため[131]との教育学的帰結が導出される。

第4章「志向性を問い合う言語ゲームにおける開放性と創造性」では、独自のウィトゲンシュタイン解釈に基づく学習理論を打ち立てたことで知られる、M・ラントレの議論に批判的検討が加えられる。ラントレは、「注視」の能力に代表される志向性が子どもに生得的に備えられていると考え、この実体の志向性を言語習得の基礎に据えるとする。それとは対照的に、「ウィトゲンシュタインの志向性概念の特徴は、制度的基盤に基づく事後的に語り出される非実体の性質である」と[157]。あらかじめ実体的に存在していない志向性を、他者とともに事後的に語り出すという「志向性を問い合う言語ゲーム」のなか、著者は「主体が志向性の物語を語り出す、開放性と創造性」[160]を見出している。最後に、ここでも再び「ウィトゲンシュタイン哲学が体制順応主義ではないこと」と[162]が確認される。

以上のように、ウィトゲンシュタインを「体制順応主義」として解釈する先行研究に対し、言語ゲームの創造性とダイナミズムを突きつけことでその乗り越えを目指すという本書の構図は、論理的に非常に明快で分かりやすい。また論証のスタイルも、さらなる議論と批判に開かれたものとなっている。以下では、3つの点について感じたことを述べていきたい。

著者が繰り返し引用する「体制順応主義（conformism）」という用語も、カイバーズ自身の立場を指すものではないだろう。「ウィトゲンシュタインに基づく教育哲学は、自尊するトと本質的に保守主義あるいは体制順応主義であるとの反論にさらされているように思われる」[139]が、「共同体論に依拠してなされる批判や反論に、本質的に体制順応主義的なものなど何もない」[140]というのは彼の主張である。カイバーズはむしろ著者と同様に、狭義の「体制順応主義」には収まらない、ウィトゲンシュタイン哲学に基づく新たな自己像の提示を試みていないのではないかだろうか。

第二に、「規範性」の内実について。著者の言う「内規範性」は、「訓練を通じて「同じこと／同じでないこと」を峻別可能になる、「ねばならない」を読み取る「循環を形成し、そして同時に規則に盲目的に服従するようになる」というものである[48]と定義される。著者によれば、規則の一致はこの内規範性のみによっては保障されない。というのも、「規則遵守を可能ならしめるものを、内規範性のみに要請するならば、「規則に従っている行為」と「規則に従っていると信じている行為」との区別がつかなくなってしまう」[49]からである。だと思えば、内規範性が実質的に意味しているのは、たんなる一人の「信念」にすぎないのだろうか。さらに、「1000, 1004, 1008, ……」と続けることが「+2」の「規則に従っていると信じている」人物は、「訓練によって「1000, 1004, 1008, ……」と続けることに盲目的になっている」[49]とされるが——後で著者が永井均に向けた問いを、ここでは著者自身に差し向けてみたい——「規範性」の体現者としてその訓練を行ったはずの「大人」あるいは「教師」と呼ばれる人物が一体何者であり、どのような規準のダイナミズムを生きていると[130]著者は想定しているのだろうか。そして、彼から訓練を受けたこの人物は、住して「規範性」を身につけたと言えるのか。

ウィトゲンシュタインが問題にする「ねばならない」という制約感は、「規範性」を身につけた他者による訓練に由来するものであろう。色の名前の呼び方や、数の数え方
といった原初的なレベルで行われる訓練においては、「規範性」から逸脱した独自の「解釈」など許されず、また不可能である。逸脱はもはや訓練の失敗として、すなわち、この人物が「規範性」をいまだ身についていない証拠として、さらなる訓練を呼び込むだけであろう。さらに言えば、こうした人物の事例はそもそも「記号解釈」図式の限界を明らかにするための「背理法」[36]の想定なのである。著者は論じていなかったが、内の規範性と外的規範性の相互矛盾から規則の動的な変容がもたらされるという図式はイメージしやすいが、その分、ウィトゲンシュタイン解釈としての整合性をもたせることが難しくなっているように思われる。

ところで、言語に代表される伝統的な価値の伝達と、その批判的探究というピーターズのイニシエーション論の2要件のうち、先行研究の多くが前者のプロセスの分析のみに終始し、後者については可能性を示唆するにとどまっていなかったことには理由がある。端的に言って、既存の言語ゲームをすべてマスターしたうえで、新しい言語ゲームの「新しさ」を証明することは、きわめて困難だからである。たしかに、たとえば鬼界形見（「ウィトゲンシュタインはこう考えた——哲学的思考の全軌跡 1912-1951」講談社、2003年）もまた、規則の「内向的制力」に言及しつつ、規則が「個人的側面」と「公的側面」をもつと述べている[358f]。さらに鬼界は、個人的なレベルでの判断がやがて硬化し、規則へと固定化されるというアイデアを「硬化理論」と名づけ、「個人的側面」から「公的側面」への働きかけに基づく規則の変容可能性について論じている[353f]。しかしながら教育学的に見た場合、規則の公的側面は、個人的側面にいつでも先行するはずである。そして、公的規則に「変容」をもたらすに至るまでに、個人ははてしない距離を歩むことになるだろう——私はここで、かくせんばやポール遊びのルールといったレベルではなく、言語や社会規範といったレベルでの「規則」や「規範性」を問題にしている。何より、ウィトゲンシュタイン自身がその全生涯をかけ、「言語の限界」を探究したのではなかったか。

第三に、「教育」の範囲について。規準の「決定権は大人に、つまり他人にあって、[子ども]本人にはない」[129]と論じる永井を、著者は「永井の描く教育像は非常に単純化されている」[130]と断じている。規準のダイナミズムを考慮に入れない限り、永井の解釈もまた「体制順応主義」に行き着く、というのがその理由である。これに対して、著者は「教育の場面において、大人の規準は阻却不可能」だと認めつつも、「しかし、大人の規準はそれ自体揺れ動きの中にあり、子供はその揺れ動きへと参入する」と主張し、それゆえ「ウィトゲンシュタイン哲学は体制順応主義を帰結しない」[131]と説く。

しかしながら、子どもが「揺れ動きへと参入する」というのは、ウィトゲンシュタインの描く「教育」の場面を踏まえた指摘になっているだろうか。もちろん、大人の営む「日常的な言語ゲーム」においては、規準は絶え間なく揺れ動いているだろう。しかし、日常的な言語ゲームのなかで語が担う多義性を拾うと、赤ならば「赤」、4ならば「4」以外の「解釈」を認めないという形で、いわば事実として方法的に構成されているのが、われわれの原初的な「教育の言語ゲーム」のほどではないだろうか——「これはたぶん「赤」などと教える大人はいない。「大人の設定する状況も外的規準もそれ自体が揺らいでいる」
[131] ようでは、子どもはいつまでたっても
言語を身につけることができないであろう。
さらに、「教育の場面において、大人の規準
は阻却不可能」[131] なほどとすれば、本書
で描かれる様々な場面——内的規範性と外的
規範性の相互調整、感覚表現の言語ゲーム、
規準の揺れ動き、志向性を問い合う言語ゲー
ム——はいずれも、結局のところ「教育の場
面」ではなかったということにならないか。

まだまだ議論は尽きないが、今後もともに
教育学におけるウィトゲンシュタイン研究を
発展させていきたいと願っている。

書誌情報
平田仁胤著「ウィトゲンシュタインと教育——言語
ゲームにおける生成と変容のダイナミズム——」
大学教育出版、2013年11月。

執筆者
渡邊福太郎（わたなべ ふたくろう）
上武大学（Jobu University）